

平成30年6月8日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04023

研究課題名(和文) 仲間の排斥・攻撃行動の許容における仲介・調整プロセスの検討

研究課題名(英文) The moderator and/or mediator effects of allowance toward exclusion / aggression behavior of in-group members

研究代表者

磯部 智加衣 (Isobe, Chikae)

千葉大学・大学院人文科学研究院・准教授

研究者番号：20420507

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：内集団成員によるネガティブ行為(社会的排斥・内集団びいき・迷惑行為)が、その成員の受容や集団評価に及ぼす影響を検討した。また、集団特徴等の状況要因と個人的な志向性の媒介・調整効果を検討することを目的とした。排斥場面において、集団信頼(状況)・組織市民行動・一般的信頼(個人志向性)は、内集団におけるネガティブ行為を抑制する可能性が示された。しかし、他者の組織市民行動・第三者の観察(状況)による抑制効果は、確認されなかった。内集団成員のネガティブ行為によって、集団への魅力は低下しづらいたことが確認された。集団地位・組織対応・組織市民行動が調整効果を持つ場合もあったが、必ずしも結果は一貫しなかった。

研究成果の概要(英文)：This research examined the effects of negative behavior by in-group members (social exclusion, group bias, and annoying behavior) on acceptance toward their members and group evaluation. In addition, the effect of group characteristics and individual traits as mediator and/or moderator, were examined in this process. Group trust, organization citizen behavior, and general trust could suppress negative behavior of in-group member. However, perceived organizational citizen behavior of other members and existence of third party were difficult to reduce negative behavior. It was shown repeatedly that negative behavior by in-group members would not decrease the attractiveness to the in-group. The moderating effects of group status, organizational response and organizational citizen behavior could not showed always consistent.

研究分野：社会心理学

キーワード：仲間の受容 排斥 攻撃行動 集団間関係 集団アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

社会的弱者（いじめられっ子）やネガティブな行為をした者に対し、過度の排斥・攻撃行為が行われることがある（正義の名の下の排斥・攻撃）。そして、そのような排斥・攻撃を許容し同調が行われることが、さらなる排斥・攻撃行為の深刻化をもたらすという過程が見受けられる。

近年、排斥者と被排斥者の関係および集団間関係性に着目した排斥と集団（成員）との関係について多く検討されてきたが（ex., Heather and Bernstein, 2014）、加担という立場にも着目し、排斥・攻撃の観察者を対象として検討をしたものは少ない。また、他者攻撃の研究においても、攻撃が生起しやすい要因についての検討が多く、援助行動の研究では、加担まで積極的に扱っていない。

これまでの社会的排斥の研究は、所属欲求の高まりが内集団への愛着を高めることにより一時的にディストレスが緩和される（所属調整モデル; Gardner, et al., 2005）という過程に着目したものが多く、個人としてどのような対応をすればよいかの示唆にとどまっていた（ex. Claypool, and Bernstein, 2014）。しかしながら、問題をより社会的視点に拡大して捉え、状況、特に集団間関係や組織風土の影響を検討する必要がある。

排斥・攻撃の観察者に着目することで、排斥・攻撃のメカニズムをより複合的に理解し、いじめや攻撃を深刻化させないためにどのような環境づくり（集団づくりや情報提供）が望ましいかについて提言をもたらす必要がある。

2. 研究の目的

排斥・攻撃に対する個人的な志向性と集団特徴が、排斥・攻撃行為への加担を抑制する過程を明らかにすることが本研究の目的である。仲間による排斥・攻撃行為の許容に関して、集団特徴としては、集合的信頼・集団間関係・組織的（多数派の）行動を扱う。個人的な志向性としては、一般的信頼・組織市民行動・共感性他を扱う。

これらの仲介・調整変数が、対象者および対象者の行為への評価・集団の評価・受容・排斥に及ぼす効果を検討する。

3. 研究の方法

(1) 内集団における社会的排斥に焦点をあて、他成員の行動・集団特徴が、被拒絶者への援助行動や受容・集団魅力に及ぼす影響を検討した。

(2) 内集団成員の内集団びいきに焦点をあて、集団関係／第3者観察の有無が、内集団びいき（外集団攻撃）の許容に及ぼす影響を検討した。

(3) 内集団成員による迷惑行為に焦点をあて、内集団成員に対する評価・受容、集団評価に集団特徴が及ぼす影響を検討した。

上記の影響過程について、場面想定法・実

験を用いて検討した。詳細は以下の研究成果においてそれぞれ記載する。

4. 研究成果

(1) ①〔学会発表⑦〕

概要：集団信頼が、拒絶場面を人がどのように捉え、対応するのかを検討した。また、組織市民行動他の調整効果を検討した。仲間の排斥の観察により集団魅力は下がらず、被排斥者とみなされた場合は受容されにくいという結果が示された。一方で、集団信頼が高いほうが、被排斥者を受容されやすいことが示され、被排斥者への援助行動において集団信頼を高めることの有効性が示唆された。さらに、組織市民行動の高い個人は、被拒絶者を受容しようとはするものの、拒絶に加担する集団を魅力的とは考えないことも分かった。

方法

実験参加者 大学生 81名（男性 37名、女性 44名、平均年齢 19.9歳、標準偏差 1.68）が参加した。参加者には、質問紙に回答してもらったのちに、実験に参加してもらった。

事前質問紙 組織市民行動（西田, 2000）から大学における場面で回答できる項目を選択し、内容を一部変更して用いた。一般的信頼（山岸, 1994）、多次元共感性尺度（鈴木・木野, 2008）他。

実験手続き 参加者には「人々の意思決定過程の実験」であり、自分を含め4名が参加していると伝えた。集団信頼の操作を行うための前段階として、また他の実験目的のため、社会的ジレンマゲームを行った。社会的ジレンマゲームを2回行った後、3回目のゲーム前に、コミュニケーション課題を行うとし、排斥場面を観察してもらった。実験終了後、ディブリーフィングを行い、実験報酬（500円）を渡した。なお、参加者には、リクルート時に事前調査を行い、個人特性の測定を行った。集団信頼の操作：コミュニケーション課題を行う前に、参加者に2回目の社会的ジレンマゲームの結果が書かれた記録用紙を見せてしまう状況をつくることにより行った。記録用紙には、自分以外の集団メンバー（3名）が協力的であることを意味する内容が書かれていた。本実験では、このゲームの記録用紙を見たか否かを課題後に確認し、見たものを高信頼条件、見なかったものを統制条件とした。コミュニケーション課題：排斥場面、および援助行動の測定：Wolf, et al. (2015)による Ostracism Paradigm を援用し、排斥の観察場面を観察できるようにプログラムを変更したのを用いた。参加者は他の3人の参加者とともにオンライン上でのコミュニケーションを行うと説明された。お互いの自己紹介文を掲載し、それを評価しあう（「いいね！」ボタンを押す）というものであった。本実験では、1人のメンバー（被排斥者）が、他の2人から「いいね！」ボタンを押してもらえないようにプログラムされていた。一方、その他3名は、「いいね！」

を3名全員からもらえる。この場面において、参加者が被排斥者に「いいね！」の評価をするかを排斥の援助行動指標とした。また、コミュニケーション課題終了後、受容拒否態度 (Isobe & Ura, 2005, 14項目・7件法)、集団アイデンティティ (4項目・5件法)、集団信頼尺度 (独自に作成; 5項目・5件法)、コミュニケーション前にも測定 $\alpha s > .72$)、その他の統制・調整変数に回答を求めた。

結果

操作チェック: 「意図的に排斥されていると感じたか (排斥感)」という設問において、気がつかない者が一定数いた。そのため、中央値4に基づき参加者を排斥感 高-低 の2群に分割した (4の回答は排除)。なお、この変数と集団信頼の操作との関連は認められなかった。知覚された集団信頼の変化量 (コミュニケーション後-前) を従属変数とし、集団信頼×排斥感の分散分析を行った (共変量: コミュニケーション前の知覚された集団信頼)。その結果、集団信頼の主効果が有意である傾向が認められた ($F(1, 63) = 3.93, p < .10$ (信頼高 ($M = .88, SD = .77$), 統制 ($M = .64, SD = .63$)))。

被排斥者への受容的態度 (14項目, $\alpha = .80$): 受容的を従属変数とし、集団信頼×排斥感の分散分析を行った。その結果、受容的態度において集団信頼の主効果が有意であった ($F(1, 59) = 7.77, p < .01$)。集団信頼高条件 ($M = 5.31, SD = .51$) のほうが、統制条件 ($M = 4.96, SD = .59$) よりも受容的であることが示された。また、排斥感の主効果も認められ ($F(1, 59) = 4.14, p < .05$)、排斥感低群 ($M = 6.13, SD = .62$) のほうが、高群 ($M = 5.82, SD = .78$) よりも、受容的態度が高いことが示された。

集団アイデンティティ: 集団アイデンティティに関しては、集団信頼×排斥感×Time (コミュニケーション前-後; 被験者内) の分散分析を行った。Timeの主効果のみが認められた ($F(1, 59) = 21.45, p < .001$)。コミュニケーション前 ($M = 2.07, SD = .83$) よりも、コミュニケーション後 ($M = 2.88, SD = 1.00$) に集団アイデンティティが高いことが確認された。

さらに、各変数間の相関を算出した。集団アイデンティティと受容的態度 ($r(64) = .258, p < .001$) に関係が認められた。受容的態度・集団アイデンティティは、実験募集時に測定した、拒絶感受性・一般的信頼・公正世界観等との関連は認められなかった。

(本研究は、著者が指導した卒業生と共同で行った。)

② [学会発表③]

概要: 拒絶に対して、他の集団成員が加担・非難することによって、人がどのようにその場面を捉え、対応するのかを検討した。また、組織市民行動他の調整効果を検討した。

結果より、拒絶場面における援助行動には、周囲の他者の影響を受けやすく同調する傾

向にあることが示された。また、拒絶というネガティブなイベントが起こった集団と認知しているにも関わらず、集団への魅力が低まらないことが示された。この結果は、これまでの研究と一貫するものである。しかしながら、組織市民行動や一般的信頼・他者思考的反応が高い人は、周囲の反応に同調せず、被拒絶者を受け入れようとしていた。さらに、組織市民行動が高い人は、加担条件で集団魅力を下げていることから、集団に対する評価・愛着のあり方 (集団に求めるもの) が、組織市民行動が低い人たちと異なっていることが考えられる。

方法

実験参加者 大学生 81名 (男性 37名、女性 44名、平均年齢 19.9歳、標準偏差 1.68) が参加した。参加者には、質問紙に回答してもらったのちに、実験に参加してもらった。

事前質問紙 組織市民行動 (西田, 2000) から大学における場面で回答できる項目を選択し、内容を一部変更して用いた。一般的信頼 (山岸, 1994)、多次元共感性尺度 (鈴木・木野, 2008) 他。

実験手続き 参加者には「コミュニケーションのゲームパフォーマンスへの影響」と教示した。また、同性の5名で参加しているとし、個別に仕切られた実験室で実験を行った。実際には参加者は1名で、残りの4名は実験者と実験協力者で実験を遂行した。コミュニケーション課題において、拒絶者 (A) が被拒絶者 (B) を繰り返し拒絶した。その後、条件ごとに残り2名 (C・E) の言動を操作した。擁護条件では、Aの4度目の拒絶後にC・Eの2名が被拒絶者を擁護 (拒絶者を拒絶) した。一方、加担条件では2名とも拒絶者と同様に被拒絶者を拒絶した。無関与条件では、2名とも4回目の拒絶場面以降発言をしなかった。事後質問紙に回答した後、ディブリーフィングを行った。

結果

拒絶の認知: 被拒絶者における拒絶の認知は、加担 ($M = 4.96, SD = 2.10$) の時のほうが非難 ($M = 3.52, SD = 1.83$) よりも高かった ($F(2, 80) = 4.47, p < .05$, 傍観; $M = 3.67, SD = 1.92$)。一方、拒絶者における拒絶の認知は、非難 ($M = 4.11, SD = 1.37$) の時のほうが、加担 ($M = 1.56, SD = .801$)・傍観 ($M = 2.26, SD = 1.43$) よりも高かった ($F(2, 80) = 17.00, p < .001$)。この結果は、拒絶者・被拒絶者の態度が一定であっても、他の人がどのような態度かによって、拒絶の認知が異なることが示している。周囲の人が拒絶行為に加担しなければ、拒絶として認知されにくいことが分かった。

集団への態度: 集団同一視 ($F(2, 80) = 1.32, ns.$)、集団信頼 ($F(2, 80) = 0.34, ns.$)、集団移行の希望 ($F(2, 80) = .05, p < .001, ns.$)、いずれにおいても主効果は認められなかった。つまり、拒絶行為が行われている集団であっても、拒絶を非難する成員のいる集団であつ

ても、集団の魅力には影響を与えないことが示された。

拒絶者・被拒絶者への態度: 拒絶者・被拒絶者それぞれについて、後に相互作用する機会があるとすればどのような態度をとるかについて尋ねた。対象(拒絶者・被拒絶者)を被験者内とし、周囲の対応×対象の分散分析を行った。その結果交互作用が有意であった(図 a-2-1)。周囲の他者が拒絶者を非難したとき、言い換えれば、被拒絶者を擁護したとき、被拒絶者に受容的な態度をとることが示された。拒絶の認知の結果を考慮すると、加担条件において、拒絶されていると認知していると、受容的な態度が下がる可能性が考えられる。排斥場面の周囲との同調的な態度をとる傾向にあった。

組織市民行動: まず、組織市民行動の全項目の平均得点を算出し、その平均値によって参加者を2群に分けた。被拒絶者への受容的態度について、周囲の反応×組織市民行動の結果、2要因の交互作用が認められ(図 a-2-2)、加担条件において組織市民行動の低い人は受容的態度をとらないことが示された。続いて、同集団に居続けたいか、という問いに対し、周囲の反応×組織市民行動の分散分析を行った。その結果、交互作用が有意であった($F(2,80)=3.20, p<.05$ 、図 a-2-3)。非難条件では、組織市民行動が高い人のほうが居続けたいとより思う傾向にあり、加担条件では組織市民行動の低い人のほうが居続けたいとより思う傾向にあった。

また、被拒絶者への受容的態度においても交互作用が有意である傾向が認められた($F(2,80)=3.10, p<.10$)。組織市民行動低群では、加担条件よりも非難条件で被拒絶を受け入れる傾向にあったが、高群では、条件による差が認められなかった。

被拒絶者における拒絶の認知においては、2要因の交互作用が認められなかったため、組織市民行動の高低にかかわらず、加担条件では拒絶者が拒絶されていることという認識には差がないが、拒絶者をサポートしようとする態度に違いがあることが分かった。ただし、組織市民行動の高い個人は、被拒絶者を受容しようとはするものの、拒絶に加担する集団を魅力的とは考えないことも分かった。

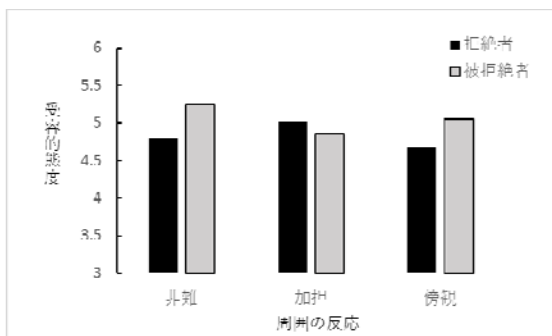


図 a-2-1 拒絶者-被拒絶者に対する受容的態度に、周囲の反応が及ぼす影響

一般的信頼: 一般的信頼においても同様に、平均値で参加者を2群に分けた。周囲の反応×一般的信頼(高群・低群)の分散分析を行ったところ、被拒絶者への受容的態度のみで、交互作用が有意である傾向が認められた。一般的信頼が低い人は、非難条件よりも加担条件で被拒絶者に受容的ではなかった。つまり、周囲の他者に同調する傾向にあった。一方で、一般的信頼が高い人は、条件による差が認められなかった。

(本研究は、著者が指導した卒業生と共同で行った。)

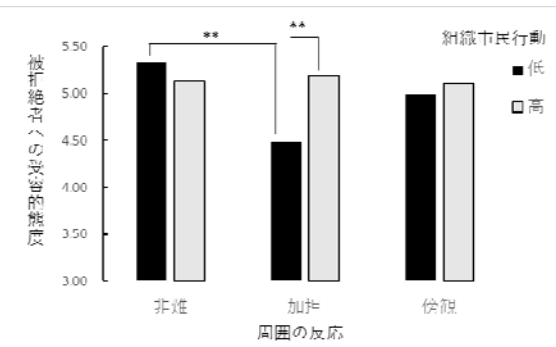


図 a-2-2 被拒絶者への受容的態度に周囲の反応と組織市民行動が及ぼす影響

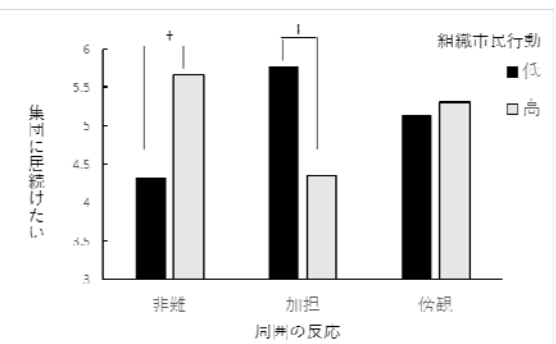


図 a-2-3 「集団に居続けたい」に周囲の反応と組織市民行動が及ぼす影響

③

概要: 他者が拒絶されている場面で周囲の人が拒絶行為に加担するのか、それともその行為を非難するのかによって、人がどのようにその場面を捉え、対応するのかを検討した。108名(女性55名・男性46名・不明7名、平均19.18歳)に対して、場面想定法による調査を行なった。その結果、提示された拒絶場面をいじめだと捉える傾向は、無関与($M=3.91, SD=1.64$)・統制($M=4.08, SD=1.55$)・援助($M=4.18, SD=1.25$)よりも、加担($M=5.20, SD=1.15$)の時のほうが高かった

($F(3,102)=4.25, p<.01$)。拒絶と捉える傾向は、援助($M=4.50, SD=.24$)よりも無関与($M=5.58, SD=.26$)・統制($M=5.58, SD=.25$)のほうが高く、加担($M=5.50, SD=.25$)が最も高かった($F(3,102)=5.60, p$

< .001)。

場面×組織市民行動(高・低)のANOVAを行ったところ、場面の主効果($F(3,102)=2.40, p < .10$)と組織市民行動の主効果($F(3,102)=6.33, p < .05$)が認められた。組織市民行動が低い人よりも、高い人の方が、援助行動をとることが示された。さらに、場面の効果を検討したところ、有意な差は認められなかった。風土の影響を検討するため、場面×他者の組織市民行動の認知(高低)の検討も行ったが、有意な差は認められなかった。また、一般的信頼の効果についても検討したが、有意な差は認められなかった。

(本研究は、著者が指導した卒業生と共同で行った。)

(2) ① [学会発表 ⑥]

概要：集団間代理報復(自分以外の内集団メンバーが外集団メンバーから攻撃されたこと)に対して、直接的な自己利益がないにも関わらず、代わりに報復する)における第三者効果を検討した。内集団・外集団以外の他者の聴衆下においては、集団間報復のないことを示すことが、内集団評価の維持・高揚を予想するため(Livingstone, Sweetman, Bracht & Haslam, 2015)、戦略的に代理報復が減少する可能性を検証した。なお、立場(リーダーか否か)の影響も検討したが、本報告書では割愛する。70名(女性55名・男性15名) 同学部・同性の3名で構成される集団で実験を実施した。

罰(金額)において、聴衆(統制・内集団・第三者)×地位(リーダー・リーダー以外)のANOVAを行った。その結果、有意な差は認められなかった(表b-1)。外集団の敵意の認知においては、聴衆の主効果が認められ($F(1, 68) = 2.91, p = .06$)、統制条件($M = 5.42, SD = .98$)よりも第三者条件($M = 4.31, SD = 1.56$)において、外集団から敵視されていないと回答していた。

(本研究は、著者が指導した卒業生と共同で行った。)

②

概要：内集団ひいきをする内集団メンバーに対する受容について検討した。55名の大学生(男性27名、女性28名)が実験に参加した。報酬分配において、内集団ひいきは認められなかった。内集団ひいきをした人に対する受容を従属変数とし、同様の分析を行ったが、有意な差は認められなかった。内集団ひいきをしたことに対する責任に関して、同様の分析を行った結果、低地位集団に比べ高地位集団のほうが、集団補償や自身が補償する必要はないとより考えていた(地位の主効果)。

(本研究は、著者が指導する学生と共同で行った。)

(3) ① [学会発表 ④]

概要：本研究では、被告人のHero/Victim情報

が、被告人への罰や拒否にどのような影響を及ぼすかを検討した。Hero情報は、被告人のagencyをVictim情報はpatency高めるため、Victim条件よりもHero情報が提示された場合、被告人に責任があると捉えられること示されている(Gray and Wegner (2011))。本研究では、369名の大学生(男性184名・女性182名・不明3名、平均18.6歳)を対象とする調査を行った。情報の呈示順序等を考慮し、Hero/Victim情報の影響を検討した。先行研究と異なり求刑にはHero/Victim情報による差が認められなかったが、刑期を終えた後にその人を受け入れるかについてはHero/Victim情報が影響を及ぼすことが明らかとなった。事件情報呈示前にVictim情報が呈示されると拒絶が低いことが示された。

(本研究は、著者が指導した学生と共同で実施した。)

② [学会発表 ①②]

概要：迷惑行為をおこなった成員(内集団成員・外集団成員)を受容するかどうか、その成員が所属する組織の対応(補償行動の有無×罪悪感-恥)がどのような影響を及ぼすかを検討した。向社会的対応のほうが評価が高かった。所属組織に厳しい反応をすることが明らかとなった。しかし、成員への態度については、集団と感情の交互作用が有意である傾向が認められた。組織が恥だと述べたとき、迷惑行為を行った内集団よりも外集団成員をより受容する傾向にあることが分かった。この結果は、組織対応なし条件において、内集団より外集団成員が受け入れられやすいという傾向を考慮すると、外集団成員が、組織から罪悪感を示されたときに、受容的態度が低くなるといえる。

方法

参加者 調査会社(株式会社クロス・マーケティング)に委託し、性別と年齢を統制した400名(一般企業に勤める一般社員)を対象とした。刺激呈示時間に基づき、呈示文を十分に読んでいないと判断される者、場面を想像することができなかったと回答した者を分析対象から除いた。最終的な分析対象は155名であった。

質問紙 ①場面呈示：参加者の会社(内集団)の一部の社員ら、もしくは他の会社(外集団)の一部の社員らが、ごみを公園に捨て帰ったという場面を設定した。その対応として、会社が声明を出し、申し訳なく感じている(罪悪感)、もしくは恥ずかしく感じている(恥)と述べたことと感情対応を操作した。加えて、関係者への謝罪と清掃活動を指導する(行動あり)、もしくは特に対応はしない(行動なし)、とすることで行動対応を操作した。また、会社への対応について記載のない統制条件も設定した。②集団同一視尺度短縮版(唐沢, 1991, 7項目, $\alpha = .74$)。③組織対応の適切さ(行動7項目, $\alpha = .92$ ・感情6項目, $\alpha = .94$) ④声明の効果、迷惑行為の

認知等 ⑤迷惑行為者への受容的態度 ($\alpha = .88$)。③④は独自に作成。②③⑤は7件法。

結果

集団同一視を従属変数とし、集団×感情対応×行動対応の3要因分散分析を行った。

結果、有意な差は認められなかった。

行動の適切さにおいては、行動対応の主効果のみが有意であった ($F(1, 154) = 30.8, p < .001$ 。行動あり $M = 4.31, SD = .96$ > なし $M = 3.33, SD = 1.09$)。感情の適切さにおいては、集団と対応の主効果と集団×対応の交互作用が有意であった ($F_s > 5.19, p_s < .05$)。内集団において、対応なし条件 ($M = 3.23, SD = 1.22$) では、対応あり条件 ($M = 4.28, SD = .99$) よりも感情の適切さが低いと評価されていた。その他、恥かつ対応なしの場合には、毅然としていないと評価されること、この傾向は、内集団において顕著であることが示された。また、罪悪感かつ対応なしの場合は、批判を抑制できないとされていた。会社の責任は、外集団よりも内集団の方が高かった。

受容的態度においては、集団の主効果と集団×感情の交互作用が認められた ($F_s > 5.19, p_s < .05$)。内集団成員よりも外集団成員への受容的態度が高かった。外集団において、罪悪感 ($M = 4.20, SD = .61$) よりも恥 ($M = 4.64, SD = .83$) と表明された時、迷惑行為を行った人に対する受容的態度が高かった。

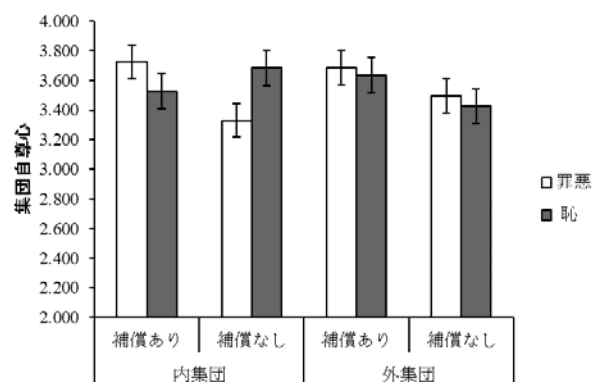
さらに、集合的感情の生起と組織的対応との関係について検討した。集合的恥よりも集合的罪悪感が、組織対応の必要性を予測していた。

(本研究は、著者が指導した学生と共同で実施した。)

③

概要：②の再現性の確認のため、迷惑行為を変更して行った。おこなった成員(内集団成員-外集団成員)を受容するかどうか、その成員が所属する組織の対応(補償行動の有無×罪悪感-恥)がどのような影響を及ぼすかを検討した。Web調査を用いて、会社員600名(分析対象575名)に、場面想定法による調査を実施した。場面呈示：参加者の会社(内集団)の一部の社員ら、もしくは他の会社(外集団)の一部の社員らが、世界遺産に落書きをしたという場面を設定した。

結果は、内集団の成員の逸脱行為に対し、組織が罪悪感を示しつつ補償行動をとらないとした場合に、内集団評価が最も低いことが示された。また、外集団成員の逸脱行為に対し、その組織が恥よりも罪悪感を示し補償行動をとらないとしたときに、内集団アイデンティティが高いことが示された。さらに、逸脱行為を行った人々に対する受容については、外集団よりも内集団成員への受け入れが高いことが示された(図c-3-1)。この傾向は公団勤務の参加者において認められていた。



図c-3-1 集団・組織対応・感情が集団自尊心に及ぼす影響

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計 7 件)

- ① Chikae ISOBE Group-based guilt and shame toward in-group members' annoyance behavior facilitate the need for organizational apology 29th International congress of applied psychology 2018 年 (国際学会 accepted)
- ② 儀部智加衣 成員の迷惑行為への組織対応が集団同一視におよぼす影響 (2) 日本社会心理学会第 58 回大会 2017 年
- ③ 儀部智加衣 拒絶場面における周囲の反応が、被拒絶者・拒絶者への態度に及ぼす影響 日本グループダイナミクス学会第 64 回大会 2017 年
- ④ Chikae ISOBE The effect of defendant's Hero/Victim information on judgment of punishment and rejection toward him Asian Association of Social Psychology 2017 conference 2017 年 (国際学会)
- ⑤ 儀部智加衣・高木 彩 成員の迷惑行為への組織対応が集団同一視におよぼす影響 日本心理学会第 81 回大会 2017 年
- ⑥ Chikae Isobe & Taishi Kawamoto The effect of third parties on intergroup vicarious retribution International convention of psychological science 2017 年 (国際学会)
- ⑦ 儀部智加衣・川本大志 集団信頼が排斥者場面における傍観行為に及ぼす影響 グループダイナミクス学会 2016 年

6. 研究組織

(1)研究代表者

儀部 智加衣 (ISOBE Chikae)
千葉大学・大学院人文科学研究院
・准教授
研究者番号：20420507